

聖書：Ⅱサムエル2：1～3：1

説教題：戦いは長引いたが

日時：2017年12月10日（夕拝）

ダビデのいのちをしつこく狙ったイスラエルの初代王サウルは、サムエル記第一の最終章で死にました。ダビデはその知らせに接して悼み悲しんで泣き、哀歌を作ったことが前のサムエル記第二1章に記されました。こうしてダビデはいよいよイスラエルの第2代の王になって行くのだらうと私たちは予想します。しかしそこに至るにはまだ様々なプロセスのあったことが今日見る2章以降しばらく記されていきます。

まずダビデは主の御心を伺います。「ユダの一つの町へ上って行くべきでしょうか。」すると主から「上って行け」とのお答えがありました。「どこへ上るのでしょうか」と問うと、「ヘブロンへ」とのお答えがありました。ここに主と正しい関係に回復しているダビデの姿を私たちは見ます。自分の知恵や判断に頼って行動するのではなく、まず主の御心を伺う。そして示された御心に従っていく。こうしてダビデはヘブロンへと移住します。するとユダの人々がやって来てダビデに油を注ぎ、ユダの家の王とします。ダビデはすでに預言者サムエルを通して主の油注ぎを受けていましたが、こうしてイスラエルの一つの家、ユダ部族からの承認を受けたのです。まずは幸先の良いスタートです。

ダビデはヨルダン川東側に住むヤベシュ・ギルアデの人々に使いを送り、彼らへの感謝と祝福の言葉を述べます。彼らはサムエル記第一31章に記されていたように、サウルの遺体を丁重に葬った人々でした。彼らはサウル王の初期の頃に、アモン人から助け出してもらった人々で、サウルに特別の恩義を感じていて、サウルが亡くなったと聞いた時、しかもそのなきがらが城壁にさらしものにされていると聞いた時、勇気を奮って引き取りに出かけ、ふさわしい葬りをした人々でした。その功績に対してダビデは感謝を述べたのです。さて私たちはこれをどう見るべきでしょうか。ある人はここにダビデの政治的抜け目なさを見ます。ヤベシュ・ギルアデの住民はサウルのためには何でもするサウルの支持者です。ダビデはサウルがいなくなった今、彼らをうまく自分の側に取り込もうとしてリップサービスをしているとある人は見ます。しかし私たちはこの時のダビデを人間的な知恵で動く単なる策謀家のように見るべきではないと思います。前回見ましたようにダビデはサウルの死を心から悲しみました。ダビデはサウルに命を

狙われた人でしたが、サウルの死の知らせに接して、これを喜び祝ったのではなく、心から悲しんだのです。そういうダビデはヤベシュ・ギルアデの住民がサウルにした親切を聞いて自分のことのように嬉しく思ったのです。だから感謝したのです。確かにダビデの言葉の中には、自分がこれからイスラエルの王になることを前提にした表現があります。6節で彼は「この私も、あなたがたがこのようなことをしたので、善をもって報いよう。」と言っています。また7節後半では「あなたがたの主君サウルは死んだが、ユダの家は私に油を注いで、彼らの王としたのだ。」と言っています。これはダビデ自身、自分が王になる時が来たのだと考えていたことの現われでしょう。別に野心家的な発言をしたわけではありません。むしろ注目すべきは、ダビデの心はユダ部族にばかりでなく全イスラエルに向かって開かれていたということ。彼はサウルのために良いことをしてくれた人たちに心からの感謝を述べて、イスラエルの国が平和と一致の内に再び建て上げられて行くことを願ったのでしょう。

しかしでした。ダビデが東側の人々にメッセージを送る一方で、そちら側では新たな動きが起こっていたことが8節以降に記されています。サウルの將軍であったネルの子アブネルが、サウルの生き残りの子イシュ・ボシェテをマハナインに連れて行って王としたのです。このマハナインはヤベシュ・ギルアデのすぐ近くの町です。ヤベシュ・ギルアデがダビデのメッセージにどう応答したかは書かれていませんが、そのすぐそばのマハナインでこのような出来事が起こったことによってダビデの挨拶はもみ消されたかのようです。この対抗勢力の出現によって、9節にある通り、ギルアデ、アシュル人、イズレエル、エフライム、ベニヤミン、全イスラエルの王はイシュ・ボシェテになりました！その結果、ダビデは10節にある通り、ユダ族の王になるにとどまりました。そして11節にあるように、ダビデがイスラエル全体の王になるまでに、さらにここから7年6ヶ月も待たされることになったのです。何と事は人間の思い通りに運ばないものでしょうか。何とダビデの王に至る道はスムーズでなかったことでしょうか。私たちも自分の願う通りに事が進まない時、困難の中にある時、このことを思い起こしたいと思います。あのダビデもこんなにゆっくりしか進まなかった！あのダビデもこんなに待たされたのだ！と。

さて、こうして北と南で別々の王が立てられたことによって事態はどう動いて行ったでしょう。当然のように二つの家には戦いが生じることとなりました。まずその仕掛け人はサウルの將軍であったアブネル。彼はイシュ・ボシェテを王に立てましたが、実権

を握っていたのはアブネルでした。一方のダビデの軍隊の長はツェルヤの子ヨアブ。ツェルヤはダビデの姉妹の名です。ですからその子ヨアブはダビデのおいにあたります。この二人の将軍が突然、表舞台に出て来て、まるでダビデをそっちのけで戦い始めます。まず最初は双方から 12 人ずつ代表戦士を出して闘技させます。これは不必要な流血を防ぐためのものでしょう。以前、ダビデとゴリヤテが戦った時は 1 対 1 の勝負でした。ここで 12 人を出し合ったのはイスラエルの 12 部族の数と関係していたに違いありません。この戦いに勝った方がイスラエル 12 部族を治めるのだというしるしだったのでしょう。しかし 16 節にある通り、代表戦士たちは互いに相手の頭をつかみ、相手のわき腹に剣を刺し、一つになって倒れてしまいます。そのため決着がつかず、激しい全面戦争へと発展します。

ツェルヤの 3 人の息子はアブネルを追いかけます。特に足の速いアサエルはアブネルを執拗に追いかけました。アブネルとしてはアサエルを殺したくはなかったようです。22 節で「私を追うのをやめて、ほかへ行け。なんでおまえを地に打ち倒すことができよう。どうしておまえの兄弟ヨアブに顔向けができよう。」とっています。しかしアサエルは言うことを聞きません。そのためアブネルはアサエルを突き刺します。これは相当な衝撃だったようで人々は皆そこで立ち止まります。しかし残された二人の兄弟ヨアブとアビシャイがアブネルを追いかけます。そうして日が沈む頃に、アブネルが丘の頂上から呼びかけます。26 節：「いつまでも剣が人を滅ぼして良いものか。その果ては、ひどいことになるのを知らないのか。いつになったら、兵士たちに、自分の兄弟たちを追うのをやめて帰れ、と命じるつもりか。」アブネルは状況が不利になって来たこともあったのでしょう。停戦を呼びかけます。ヨアブも同意します。彼の角笛によって兵士たちはみな立ち止まり、戦いをやめます。結果として、ダビデの家では家来 19 人とアサエルが失われました。一方のサウルの家ではアブネルの部下 360 人が失われました。こうして彼らは自分たちがいたマハナインとヘブロンへそれぞれ帰って行ったのです。

果たしてこのような記事から私たちはどんなメッセージを読み取れば良いのでしょうか。その視点が 3 章 1 節にあります。まず 1 節前半：「サウルの家とダビデの家との間には、長く戦いが続いた。」今日の記事はサウルの家とダビデの家との間に起こった戦いの一つの例です。このような戦いが実際には長く続いたと記されています。ダビデはサウルの死後、すぐ王座に着けたのではなかったのです。そこに至るまでには様々な紆余曲折、また好ましくない内紛があったのです。ダビデは長期にわたるサウルの迫

害から解放されたのですから、これ以上はもういいのではないかというのが人間の考えでしょう。しかし現実は何と人間の思いと異なることでしょうか。ダビデはこの時点に至っても、なお忍耐の時を過ごすようにと導かれたのです。しかし3章1節はもう一つのメッセージも語っています。1節後半：「ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなった。」このことは良く見れば2章の記事にも示されていました。一つは17節です。そこを見ると、「その日、戦いは激しさをきわめ、アブネルとイスラエルの兵士たちは、ダビデの家来たちに打ち負かされた。」とありました。12人ずつの代表者たちの戦いでは決着がつかず、全面戦争に発展しましたが、そこではダビデの家が優勢だったのです。30～31節もそうです。アブネルの呼びかけで両者は停戦し、引き分けの格好になりましたが、ダビデの家は家来19人とアサエルの計20人を失った一方で、サウルの家では360人が失われました。ダビデの家の実に18倍です。このようにして一見無意味な混乱だけがあったようなⅡサムエル記2章でしたが、この書の著者は重要なメッセージがここにあることを強調しています。すなわちそこには神の密かな導きの御手が働いていた。「密かな」と言ったのは、結果はすぐにそれと分かるものではなかったからです。戦いは長く続いたのです。どう転ぶが分からないように人間には見える状況もあったのです。しかしそこには着実な神の導きがあったのです。ダビデの視点からもう一度簡単に振り返ってみたいと思います。彼としてはサウルの迫害から解放され、主からヘブロンへの道も示され、ユダの人々からの油注ぎも受けて、いよいよ時が来たと思っていたでしょう。ところが対抗勢力が現れて足踏み状態となります。そして決して望んでいない争いが二人の将軍によって始められてしまいます。相手方のアブネルはもともとサウルの軍隊長で、百戦錬磨の手強い存在です。しかし手強いのは彼だけではありません。こちらから出て行った軍団長ヨアブもまたそうです。次回見る3章最後の節で、ダビデは特にこのヨアブを指して「私にとって手強すぎる」と言っています。ヨアブは先に述べたようにダビデのおいにあたる人でしたが、必ずしもダビデと心が一致していない人物でした。このような血の気の荒い二人が突然表舞台に出て来て色々かき回しています。ダビデは平和的な解決と一致を願っているのに、好ましくない混乱が引き起こされています。ダビデにとっては、心かき乱されるような状況が目の前で展開したのではないのでしょうか。しかし3章1節後半の言葉は、このような混乱の上にも主がおられたことを示しています。ただ人間のドタバタ劇が繰り返り広げられていただけではなく、主がその上におられて、人間の悪さをも逆に用いて、ご自身の御心を成し遂げることに向かって、密かに、しかし力強く働いておられた。このような主があらゆる出来事の上におられて、奇しい主権の御手をもってすべてを導いて下さっていると知るなら、

色々な状況を前にして騒ぎ立つ私たちの心は大きく静められるのではないのでしょうか。

私たちの生活にも色々な混乱状態があるかもしれません。アブネルやヨアブのように、願わない仕方で色々動いている人がいるかもしれません。しかし今日の箇所から私たちが持ちたい確信は、人間が動き回り、人間によってかき回されているように見える状況があっても、そこですべてを支配しているのは主なる神であるということです。私たちは見える人間の動きに目を奪われ、一喜一憂し、あるいは圧倒され、あるいはそのことに落胆失望させられやすいのですが、しかし実権を握っているのではその人たちではない。主こそ人間にはすぐにそれとは分からない隠れた御手を持って、すべてを力強く導いておられる方です。とするなら私たちはこの方こそを恐れ、この方に私たちのすべての信頼を置いて従って行けば良いのではないのでしょうか。落胆するような状況からも私たちの益を取り出し、御心を実現される真の主権者に信頼し、その御言葉に聞き従う生活をして行けば良いのではないのでしょうか。その人こそ、あらゆる混乱の中で最も確かな岩に立っている人なのではないのでしょうか。

「サウル王家とダビデ王家との戦いは長引いたが、ダビデはますます勢力を増し、サウルの家は次第に衰えていった。」 私たちが巻き込まれている戦いも、なお長引くかもしれません。忍耐の歩みを重ねて来て、なお終わりのない忍耐の道を歩まされているように感じるかもしれません。しかし主はそこにおられます。そして御心をなすために奇しい御手をもって働いておられます。そのことを見上げて私たちは勇気を失わず、なお主と主のみことばに聞き従う歩みをささげて行きたいのです。そして忍耐の歩みを経て、その先に主が備えていてくださる素晴らしい祝福に入れていただく歩みへ進みたいのです。